

## 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク現地再審査報告書

中田節也・柚洞一央・大嶋利幸

期間：平成 25 年 11 月 27～28 日

主な参加者（所属）

山岸正裕（勝山市長）、松村誠一（勝山市副市長・恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会会長）、水上実喜夫（同協議会事務局長・勝山市企画財政部長兼未来創造課長）、畑中健徳（同協議会事務局・同課ジオパーク推進室長）、吉田知晃（同協議会事務局・同室主事）、木下裕基（勝山市教育委員会教育部生涯学習・スポーツ課主事）、森石義浩（勝山市企画財政部未来創造課未来政策・国際交流グループ主任）、島田英夫（福井県観光営業部ブランド営業課参事）、東洋一（福井県立恐竜博物館名誉館長）、竹内利寿（同館館長）、宮田和周（同館主任研究員）、上田秋光（NPO法人恐竜のまち勝山応援隊理事長）、但川（ただかわ）弥生（同応援隊ジオ・観光部長）、大平重衛門（株式会社東急リゾートサービス統括総支配人）、堀江千尋（公益社団法人福井県観光連盟主査）、前田勝彦（社団法人勝山観光協会事務局長）、小林則夫（ジオパークガイドの会）ほか

見学地点

- 1 日目：七里壁（市内河岸段丘）、大矢谷白山神社、化石発掘現場（北谷町杉山）、恐竜の森（チャマゴンランド）、ゆめおーれ勝山
- 2 日目：平泉寺白山神社、福井県立恐竜博物館

現地再審査のまとめ

#### 1) ジオパークの名称とテーマ

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークは、その名前が示す通り、恐竜化石だけがクローズアップされている印象を受ける。ジオパーク関係者にもそのような傾向が窺えるが、九頭竜川の河岸段丘や、経ヶ岳の崩壊堆積物など、恐竜化石以外のジオサイトも豊富に認められる。

#### 2) ジオサイトと保全

ジオサイトに関してははっきりした保全計画はまだ立てられていないが、その大半が白山国立公園、奥越高原県立自然公園のエリアに位置しているため法令的に保全保護がされている。恐竜化石発掘地の一部は「トリゴイデス等包含層」として市の文化財保護条例により保護されている。化石発掘地は排水を処理後に放水したり、崩壊を防ぐために護岸工事をするなどし、環境に配慮したものとなっている。また、大規模な盗掘や露頭の破壊を防ぐために、一般車両の通行規制を協議中である。さらに、化石の発掘現場には、実際に発掘作業風景や実際に発掘された化石が見られるように、来年度、野外博物館が完成予定である。ただし、このような大規模の発掘がいつまでも続けられるのか、ジオパークの貴重な自然遺産の保護・保全の観点から、ふくい勝山ジオパークの考え方を整理しておく必要があると思われる。

恐竜の森では、発掘現場の屑石で発掘体験が行われている。恐竜博物館では、海外から輸入した化石が普通に販売されており、担当者の改善要求にも対応されていない。

大矢谷白山神社など岩屑なだれ堆積物のジオサイトでは定期的なモニタリングを行い、

ジオサイトが破壊されていないかどうかの確認作業を行っている。さらには地域住民が勝山の大地を育んだ自然環境の保全保護活動を行っている。市街地については勝山市景観条例等で守られている。

### 3) 教育研究活動

ジオパーク推進協議会は、県立恐竜博物館のほか、福井大学や産総研の研究者と協力体制にある。また、福井県地学会や福井県地理学会と連携している。NPO 法人「恐竜のまち勝山応援隊」、教員 OB、自然観察指導員等で作られる「わくわく体験学習推進隊」、「勝山恐竜研究会」が、恐竜化石発掘体験や自然体験等に関わる体験メニューを一般に提供している。なお、恐竜関係以外の学術研究は特に最近は行われていない。火山岩については福井大学の教員による調査が予定されている。恐竜博物館の研究成果については、一般の人でも、出版物やホームページでアクセスすることができるようになっている。

小学校 5、6 年生の理科教育の中に、地域の自然資源を活用したジオパーク野外学習が全ての学校で 2012 年から実施されている。また、毎夏休みに理科教員を対象としたジオツアーを開催している。小学校 6 年生用の理科の副教材（地域体験マップ）を、勝山市学校教育研究会理科分科会と連携して 2012 年に作成し 2013 年秋から使用されている。さらに、勝山市と周辺の地形の立体模型に地質地形情報を投影するものを作成し教育に活用し始めた。その他、市民を対象にした野外フィールドセミナー、商工会議所やホテル従業員を対象にした研修会、行政職員を対象にした「5 時からゼミ」などが開催されている。

### 4) 管理組織・運営体制

2009 年の日本ジオパーク認定後に市役所内にジオパーク推進協議会事務局が未来創造課内に設置され、管理職を含めて 3 名（内専任 1 名）がいる。恐竜博物館特別館長、福井大学教授等 3 名の学術アドバイザーがいる。ジオパークの専門員の雇用を予定している。

推進協議会自体の予算は、福井県と勝山市が半分ずつ負担している。看板の整備やパンフレットの作成については勝山市が予算を確保している。勝山市の第 5 次総合計画（平成 23 年 3 月策定）の基本政策では、3 本柱の一つとして「エコミュージアムの新たな展開による市民力の向上」がうたわれており、その項目として「(1)ジオパークの推進によるまちの活性化」、「(2)エコ環境都市の実現」が挙げられている。このように、ふくい勝山ジオパークでは、勝山市のエコミュージアムの推進のツールとしてジオパークが推進されてきたことが明らかである。

### 5) 地域の持続的な発展とジオツーリズム、ガイド養成

県立恐竜博物館には年間 60 万人を超す集客力があり、この巨大な訪問客を博物館以外のジオサイトやジオパーク関連サイトに導入する仕組みが必要である。ジオパークの情報発信拠点は、認定当初、ふくい勝山ジオパークの代表的な施設である県立恐竜博物館が担うものと理解していたが、現在、博物館にはその機能もなく、その意識もないものと思われる。新たな拠点として、現在、恐竜の森の施設など、複数の候補が考えられている。恐竜の森の施設は博物館と隣接し、勝山市の指定管理で運営され、化石発掘体験に関して博物館と連携しながら、ジオツアーを提供しているので、今後、恐竜化石見学以外のサイト巡りの導入にも、重要な情報提供の役目を果たす位置にあると考えられる。

ジオパークのロゴマークの使用に関してはホームページで使用申請ができる仕組みにな

っており、地域住民にジオパークを周知するのに役立っている。

2010～2012年は事務局主導でツアー開催。2013年からは、専門家が入り、地域住民や観光関係者等の話し合いやアイデア出しにより、通年型のジオツアーを開催している。このワークショップは継続的に行われており、推進協議会の下部組織として位置づけられている。また、東急リゾート・スキージャム勝山で関西圏を対象にしたジオツアーを開催、えちぜん鉄道の「ジオ鉄」企画など、地域企業等と連携したジオツアーが模索・実施されている。ガイド養成講座は開催されはじめているが、知識を得ることが目的になっているなど、まだ十分なガイドが養成できていない。ガイド教本も一旦作成したものの修正点の改善が見られていないためまだ完成度が低い。

ジオ関連商品に関しては大地のストーリーを感じる商品がまだ開発されていないが、商品開発や販売を行う商工業者については市の助成率を上げて支援している。

#### 6) 国際対応

ウェブサイトは、日本語のほか英語と中国語が整備されている。また、現地の解説板には、英語が併記されている。ガイドの外国語対応はまだされていない。

#### 7) 防災・安全

学校のジオパーク学習では、自然災害・減災の内容が盛り込まれている。岩屑なだれの痕跡をたどるジオツアーにおいては、防災面を意識した解説が行われている。御堂之滝や取立山など、ジオサイトの安全施設の修理を実施した。

#### 8) ネットワークへの貢献

日本ジオパークネットワークが主催する全国大会や、研修会等には積極的に参加しているが、今後は、同じ恐竜をテーマとしているジオパークや地域との交流、JGNの地域ブロックにおける活動など、日本のジオパークにおけるふくい勝山ジオパークとしてのアイデンティティの発揮が望まれる。